

新 古筆資料の年代測定Ⅱ

——加速器質量分析法による炭素14年代測定——

池田和臣
小田寛貴

はじめに

池田と小田は共同研究として、国文学および書道史にかかわる古筆切資料の書写年代を実証するために、かつ、加速器質量分析法による炭素14年代測定法の正確度・有効性を確かめるために、古筆切・古文書・古写経などの加速器質量分析法による炭素14年代測定を続けてきた⁽¹⁾。本誌において、これまで十五年に渉って行ってきた、百点を超える炭素14年代測定のうちから主な資料の測定結果を一覧にして示しもした⁽²⁾。

幸いなことに、昨年度からまた新たに文部科学省科学研究費補助金の交付を得られることとなった。そこで、表題を「新 古筆資料の年代測定」と改め、連載を続けることになった。今回はそのⅡである。

はじめて加速器質量分析法による炭素14年代測定に接する人のため、古筆切および加速器質量分析法による炭素14年代測定についての概略を記しておきたいが、繰り返し旧稿⁽³⁾に述べもしたし、紙幅を費やさぬためにも、それにつ

いては省略したがう。ついでには、旧稿「古筆切の年代測定—加速器質量分析法による炭素14年代測定—」（『中央大文学部紀要』二二四号、二〇〇九年三月）、「続 古筆切の年代測定—加速器質量分析法による炭素14年代測定—」（『中央大文学部紀要』二二九号、二〇一〇年三月）、「古筆切の年代測定Ⅲ—加速器質量分析法による炭素14年代測定—」（『中央大文学部紀要』二三四号、二〇一一年三月）を参照されたい。

数値について確認しておく。一標準偏差（ 1σ ）の誤差範囲内に真の年代が入る確率は六八パーセント、二標準偏差（ 2σ ）の誤差範囲内に真の年代が入る確率は九五パーセントである。炭素14年代を歴史年代に較正したものが較正年代であり、（一）内の数値である。（二）の前の数値が誤差範囲の上限、（三）の後の数値が誤差範囲の下限の歴史年代である。

なお、執筆分担は、資料解説が池田、測定結果の分析が小田である。

*

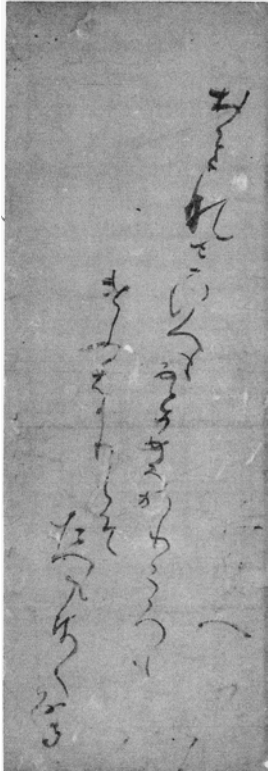
今回は、ツレ（同じ写本から分かれた断簡）が存在しないと思われる書写年代不明のもの、それも字形は平安時代から鎌倉時代くらいに見える古い書写と思われる資料について、報告する。

一 伝称筆者不明 後撰集切

後撰集の歌を散らし書きにした断簡がある（架蔵）。料紙は楮質の素紙。縦二八・二センチ、横九・八センチ。初めの一行は擦れ薄れて、何と書いてあるか判読できない。「人につかはしける」などもあるようにも思われる。その後に三行にわたり後撰集の歌（一〇七六番歌）が散らし書きされている。「おきなさひ人もなかめそかりころも／けふはかりとそ／たつともなくなる」。この歌は伊勢物語・業平集にも見えるが、すべて二句目は「ひとなどかめそ」である。こ

の断簡の「なかもそ」の部分は、余分な筆まわりがあり、明確に「なかもそ」であるとも断定できない。しかし、連綿の自在さ、仮名の字形などから、院政期の趣が強く感じられる。ツレと思われる古筆切は管見に及ばない。平安時代の書写ならば、新しい古筆切の発見ということになるのだが。

この断簡の年代測定の結果は表1のとおりである。炭素14年代は184「BP」で、この1 σ （一標準偏差）の誤差範囲184 \pm 19「BP」をINTCAL13校正曲線により暦年代に校正した値が、1667（1669）1681、1739（）1743、1763（1780）1783、1796（1798）1802、1938（1944「cal AD」）である。2 σ （二標準偏差）の誤差範囲184 \pm 38「BP」を暦年代に校正した値が、1662（1669）1684、1732（1780、1798）1807、1928（1944「cal AD」）である。2 σ の誤差範囲は九五パーセントの確率でその中に実年代を含んでいるとされるが、一七世紀後半から現代までの誤差範囲になっている。一六五〇年以降の資料の誤差範囲の下限は、現代まで広がってしまうことが分かっており、その時期の資料は炭素14年代測定では年代を絞り込むことができない。1669、1780、1798のあたりに実際の年代がある可能性が高いが、いずれにせよ江戸の書写であろう。このような平安時代風の仮名を自然に書ける者が、



後撰集切

江戸時代には存在したのである。年代測定は、江戸期の写し物やねつ造品を見定めるための、唯一と言ってよい化学的で客観的方法なのである。

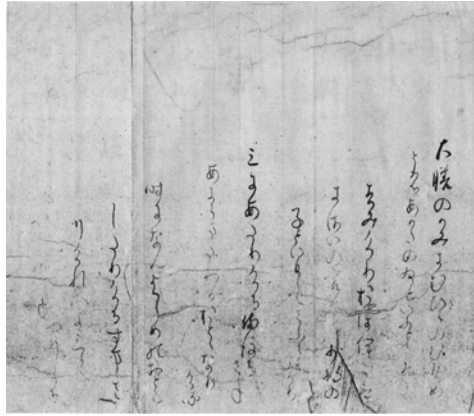
表1 伝称筆者不明「後撰集切」の測定結果

炭素14年代「BP」	較正年代「cal AD」
184 ± 19 (a.v. ± 1σ)	1667 (1669) 1681、1739 () 1743、
	1763 (1780) 1783、1796 (1798) 1802
	1938 (1944)
± 38 (a.v. ± 2σ)	1662 (1669) 1684、1732 (1780、1798)
	1807
	1928 (1944)

二 伝称筆者不明 大和物語切

あたかも本阿弥切古今集のような丸みを帯びた切れの良い筆跡で、大和物語を書いた断簡がある(架蔵)。平安時代に類用される仮名字母(「支」「裳」など)が使われていて、平安時代書写をうかがわせる。

楮質の素紙で、縦二七・二センチ、横三〇・二センチ。巻皺が走っているので、もと卷子本と思われる。大和物語百十一段が途中まで記されている。



大和物語切

大膳のかみきむひらのむすめ

ともあかたのるといふところ

すみけりおほいこは

きさいの宮に少将の

こといひてさふらひけり

三にあたりける備後守さね

あきらまたわかおと、なりける

時になむはしめのおとこ

したりけるすまさ

りければよみて

やりける

平安時代書写の大和物語の古筆切は珍しく、『古筆学大成』には伝紀貫之筆（推定藤原定実筆）二葉、筆写未詳一葉のみしか掲げられていない。しかし、後者は大和物語ではなく遍昭集であることが明らかにされている⁴⁾。そこに本阿弥切に酷似した平安書写の大和物語が認められれば、喜ばしいことになる。

測定結果は表2のとおりである。炭素14年代は174「BP」で、九五パーセントの確率でその中に実年代を含んでいるとされる2σ（二標準偏差）の誤差範囲は174±36「BP」である。これを暦年代に較正した値が、1665（1676）1689、1730（1767、1771、1777）1785、1795（1800）1809、1926（1941「cal AD」）である。一七世紀後半から現代までの誤差範囲である。一六五〇年以降の資料の

誤差範囲の下限は、現代まで広がってしまいうことが分かっており、その時期の資料は炭素14年代測定では年代を絞り込むことができないが、江戸時代中期頃の可能性が高いと推察される。

すでに江戸時代初期には、荒木素白をはじめ上代様の筆跡を身につけた書家が少なからず存在した。江戸中期には近衛家熙のような名手もいた。だから、江戸時代にあつては古い字形で書くことは難しくはなかった。やはり字形だけで時代を判断することは危ういのである。ちなみに料紙表面に薄墨が引かれているのだが、これは料紙を古く見せるための作爲なのかも知れない。

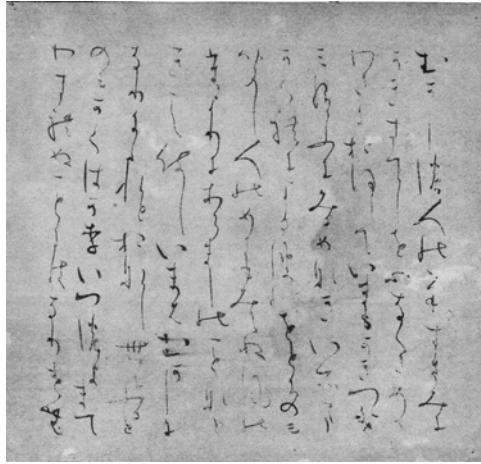
表2 伝称筆者不明「大和物語切」の測定結果

炭素14年代「BP」	較正年代「cal AD」
174 ± 18 (a.v. ± 1σ)	1688 (1676) 1682、1736 (1767、1771、1777) 1781、1797 (1800) 1805、1935 (1941) 1947
± 36 (a.v. ± 2σ)	1665 (1676) 1689、1730 (1767、1771、1785、1795 (1800) 1809、1926 (1941

三 伝称筆者不明 不明散文切

楮質の料紙に細かい雲母が撒かれている、枳形本の断簡がある(架蔵)。縦一四・一センチ、横一五・二センチ。筆跡はなかなか切れのある仮名であり、枳形本であることと合わせ考えると、鎌倉・室町くらいはありそうな感じがする。しかし、字形はいくらでも古い形を真似ることはできる。字形だけで書写年代を推定することは、不可能と言っ

てよい。一一行にわたり次のように書かれている。



不明散文切

むかしの人の手すさみに
かきすて、しを心なくさめる
わさにおほえていまもかきつ、け
み給ふにみるめなきいそま
かくれによる波のをとにのみ
聞し人のめにもみえぬ風の
たよりにあらましのことなと
きこえ待しいまはむかしに
なりにたれとおなし世にふると
のみかくはかりいつのよまで
わすれぬことにはなりけむ

年代測定の結果は、表3のとおりであった。炭素14年代が2600「BP」で、この1 σ （一標準偏差）の誤差範囲2600 \pm 17「BP」をINTCAL13較正曲線により暦年代に較正した値が、1644（1648）1654「cal AD」。2 σ （二標準偏差）の誤差範囲2600 \pm 33「BP」を暦年代に較正した値が、1641（1648）1663「cal AD」であった。枳形本という体裁、仮名の字形から、一見古い書写に感じられたが、江戸時代の筆跡であった。江戸時代には上代様の筆跡を身につけた書家が少なからず存在した。それ故、江戸時代にあつては

古い字形で書くことは難しくはなかった。やはり字形だけで時代を判断することは危うい。

表3 伝称筆者不明「不明散文切」の測定結果

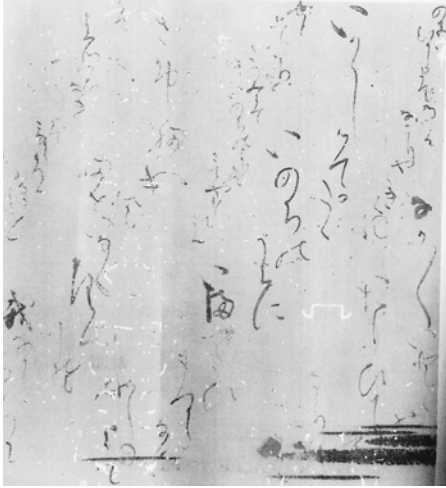
炭素14年代「BP」	較正年代「cal AD」
260 ± 17 (a.v. $\pm 1\sigma$)	1644 (1648)
± 33 (a.v. $\pm 2\sigma$)	1654
	1641 (1648)
	1663

四 伝称筆者不明 仮名消息

銀泥で槍霞を引いた雁皮質の料紙に、散らし書きされた仮名消息がある(個人蔵)。縦四九センチ、横二六・一センチ。「いかし/候てか/た、/いのちの/うちに/いま一たび/身つからなる」云々とある。

良く似た伝存品に、近衛兼教(一二六七—一三三六)が書写して高野山に納めた五部大乘経の紙背消息がある(5)。銀泥下絵があり散らしも似ている。年代が近衛兼教に重なれば、ツレの可能性が出てくる。

測定の結果は表4のとおりで、炭素14年代が 631 「BP」で、この 1σ (一標準偏差)の誤差範囲 631 ± 19 「BP」を暦年



仮名消息

代に較正した値が、1296(1304)、1316、1354(1364、1384)、1389。2σ(二標準偏差)の誤差範囲±38(a.v.±2σ)「BP」を暦年代に較正した値が、1289(1304)、1326、1343(1364、1384)、1394である。鎌倉末から南北朝のもので、近衛兼教の生存期に重なっており、五部大乘経の紙背消息のツレの可能性が高い。

表4 伝称筆者不明「仮名消息」の測定結果

炭素14年代「BP」	較正年代「cal AD」
631±19 (a.v.±1σ)	1296(1304) 1316、1354(1364、1384) 1389
±38 (a.v.±2σ)	1289(1304) 1326、1343(1364、1384) 1394

五 不明埋経

紺紙に銀泥で仁王経が書かれた断簡がある(架蔵)。縦二・五センチ、横三・五センチ。下部がだんだら模様のように損傷している。いわゆる埋経と思われる。銅製の経筒に経巻を入れ地中に埋めるので、雨水で下部に損傷が生ずるのである。埋経で有名なものは、藤原道長(九六六〜一〇二七)、その曾孫藤原師通(一〇六一〜一〇九九)のものがあるが、ともに紺紙金泥経である。

この埋経の測定結果は表5のとおりで、炭素14年代が953「BP」で、この1σ(一標準偏差)の誤差範囲953±18「BP」を暦年代に較正した値が、1029(1038) 1047、1088() 1122、1138() 1149。2σ(二標準偏差)の誤差範囲±38(a.v.±2σ)「BP」を暦年代に較正した値が、1023(103

8) 1060、1061() 1154である。平安時代の埋経であった。一一五二年の末法到来を恐れ、多くの埋経が行われたのであろう。これは、そのなかのひとつの伝存資料なのであろう。

表5 「不明埋経」の測定結果

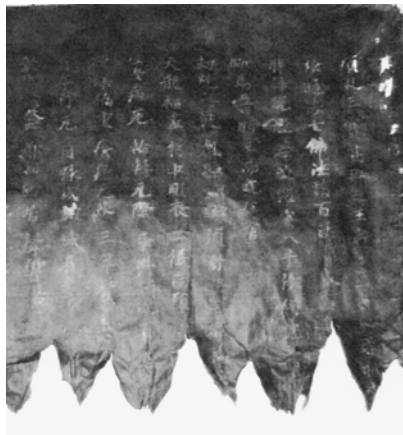
炭素14年代「BP」		較正年代「cal AD」
953 ± 18	(a.v. ± 1σ)	1029 (1038)
		1047、1088
		() 1122、1138
		8 () 1149
± 38	(a.v. ± 2σ)	1023 (1038)
		1060、1061
		() 1154

*

炭素14による年代測定は、後代の写しものや作物(贗物)をあぶり出すことのできる、唯一の化学的な方法である。美術的価値を有する文学歴史資料の闇、それに正しい光を当てることができる実証的方法なのである。

注

(1) 池田和臣・小田寛貴「加速器質量分析法による古筆切および古文書の14C年代測定」(『名古屋大学加速器質量分析計業績



不明埋経

- 報告書〔XⅡ〕名古屋大学年代測定総合研究センター、二〇〇一年三月）、池田和臣「加速器質量分析法による古筆切および古文書の14C年代測定」（『中央大学文学部紀要』一八九号、二〇〇二年二月）、小田寛貴・池田和臣・増田孝「古筆切・古文書のAMS14C年代測定―鎌倉時代の古筆切を中心に―」（名古屋大学加速器質量分析計業績報告書〔XⅤ〕名古屋大学年代測定総合研究センター、二〇〇四年三月）、池田和臣「古筆切の年代測定について―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」（久下裕利・久保木秀夫編『平安文学の新研究物語絵と古筆切を考える』新典社、二〇〇六年）。池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」（『中央大学文学部紀要』二三四号、二〇〇一年三月）、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定Ⅲ―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」（中央大学文学部紀要『二二九号、二〇〇一年三月）、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定Ⅳ―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」（中央大学文学部紀要『二二四号、二〇〇一年三月）、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定Ⅴ―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」（『中央大学文学部紀要』二二九号、二〇〇一年三月）、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定Ⅵ―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」（『中央大学文学部紀要』二二五号、二〇〇一年三月）。
- (2) 池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定Ⅶ―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」（『中央大学文学部紀要』二二四号、二〇〇一年三月）。
- (3) 池田和臣「古筆切の年代測定について―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」（『平安文学の新研究物語絵と古筆切を考える』新典社二〇〇六年九月）、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」（『中央大学文学部紀要』二二四号、二〇〇九年三月）。池田和臣・小田寛貴「続古筆切の年代測定―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」（『中央大学文学部紀要』二二九号、二〇〇一年三月）、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定Ⅲ―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」（『中央大学文学部紀要』二三四号、二〇〇一年三月）。
- (4) 村上翠亭・高城竹苞『近衛家熙写手鑑の研究』（思文閣出版、一九九八年）。
- (5) 波多野幸彦『書の文化史』（思文閣出版、一九九七年）。

謝辞

本稿において報告した古筆切の炭素14年代は、パレオ・ラボCompactAMS（CAM500、アメリカNEC社製1.5SDH）によって測定されたものである。株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループの伊藤茂氏、安昭炫氏、佐藤正教氏、

廣田正史氏、山形秀樹氏、小林紘一氏、Zaur Lomtatidze 氏、Ineza Jorjoliani 氏には炭素14年代測定を行うにあたり大変お世話になりました。心より感謝いたします。

なお、本研究は科学研究費補助金（基盤研究（B））、（課題番号…16H03101、研究代表者…小田寛貴）の一部を用いた成果である。記して、感謝いたします。